ゾンビ、思い出、レモンシトラス

柳屋イナヱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゾンビ、思い出、レモンシトラス

【Ｎコード】
Ｎ４１７８Ｚ

【作者名】
柳屋イナヱ

【あらすじ】
密売界隈で囁かれている、一つの噂。比類のない快感と副作用をもたらす、『赤』というドラッグの存在。勿論、噂は巧妙な作り話に過ぎない、はずだった。ある時から主人公・ハルの周囲で起こり始めた、不可解な出来事の連続。そして次第に芽生える、噂への疑念。「『赤』は、作り話ではない」。近未来を舞台に進む、サイコホラー・サスペンス。

シルバーの揺れ方（前書き）

ようやく連載の準備が出来ました。お楽しみ頂ければ幸いです。

シルバーの揺れ方

テレビのニュースに見入っていた。

薄い携帯の小さな画面。何世代か前の機種だが、俺にはこれで必要十分に思えた。画面の中で、上海為替市場の動向を知らせている。大分前に死んだ我が家の爺さんはよく、大昔はニューヨークという街が世界経済の中心だった、という話をしていた。ニューヨークという名前は、学生の頃、教科書でしか見たことがない。今や膨大な貧困を抱えたあの国が、遥か昔は世界経済の中心だったことを考えると、不思議な感覚になる。

ニュースの話題は次に移った。

『トヨタ＝ルノーは明日、浮遊型自動車の最終テストランを行うことを……』

俺はもう一度、爺さんを思い出す。爺さんは昔話を締めくくる時、車は相も変わらず空を飛ばないけどなと、お決まりのように笑っていた。爺さんが生きていれば、どんなに悔しそうにするだろうか。

『来年中頃の販売開始を……』

笑い声と食器のぶつかる音が、飲み屋の空気を一層下品に仕立てている。駅前の、見てくれだけは小奇麗に装った、半端に安くて不味い飲み屋だった。天井に埋め込まれた灰色の丸いスピーカー。下らないポップスが、店内全体と、俺達のいる個室にも垂れ流されている。この手の薄っぺらい音楽だけは今も昔も、これからも、廃墟

の壁に寄生する蔓のように、変わることのないように思えた。また何処かの部屋から、空気の弾けたような笑い声がここまで飛び込んでくる。

「ごゆっくりどうぞ」

無味乾燥に整った文言で、店員が言った。扉が静かに閉まる。

「来たぞ、おい」

リュードウは俺を急かした。その声に俺はテレビ機能を切る。原色が散りばめられた抽象的な待ち受けを一目見た後、画面から眼を離した。黒檀色のテーブルの上には、皿に盛られた十本ばかりの焼き鳥の串、それから酒のグラスが二つ。水面は微かに揺れている。

「塩、取ってくれ」

俺はホログラムで浮かび上がった青いメニュー表の傍から、塩の小瓶を取って渡した。リュードウの白い歯と、日焼けサロンで丹念に磨いた黒い肌のコントラスト。ポマードを塗りたくって掻き上げた髪からは独特の香りがする。空調に乗ってここまで漂うその香りは、焼き鳥から立ち上る熱気を、何だか嘘臭く彩る。リュードウは焼き鳥に塩を振った。

「この間の、あれ、なんだが」

リュードウは焼き鳥の串を摘まんでいる。

「あの薬か？」

俺は言った。

「あれな、ヨースケに売り付けてやったよ」

「ヨースケ？」

「テンジン横町のダフ屋、いただろ？」

テンジン横町、ダフ屋、ヨースケ。そう言われて、それだけは思い出せる。しかし顔までは解らない。いや。解らないと言うよりは、思い浮かんでいる顔がそいつのモノなのかはっきりしない。半ば全自動的に浮かんでいたその顔は、ダフ屋よりも、駅の電気屋に身を寄せるように転がっている、ホームレスに近い雰囲気だった。

リュードウは続ける。

「あいつ、打った途端にべろんべろんだったぜ」

俺は大笑いして言う。

「痛くも痒くもない程度の薬だったんだろ？」

「そうさ、ヨースケが飛びっきり、ヘボなんだよ」

リュードウの笑い声は下卑ている。

「ま、手頃な金ヅルになりそうで良かったな」

「皆が皆、お前みたいだったら、商売上がったりだっての」

リュードウは呆れたように笑った。こいつの言うことは、確かにその通りかもしれない。俺は何故だか薬に強い。何を飲んでも打っても、平然としていられた。きっと俺は頭だけでなく、神経まで徹底して馬鹿なのだろう。仲間がハイになる横で、俺はいつもつまらない心地でいたし、そういった不満から、あれこれと手を出してみたりもした。しかし最近は、手を出すこと自体を諦めた。どうせ『不感症』な俺に何を売り付けても解るまいと、砕いて乾かした梅干しの種を五千円で売り付けられた時に、すっぱりと止めた。そこでようやく、金と時間の無駄だと気が付いたのだ。俺の身体は梅干しの種とモルヒネの違いさえ、解りっこないのだから。

「『赤』なら俺だって、ブッ飛べるかもなあ」

俺は言った。リュードウはわざとらしく口角を釣り上げ、苦笑い

を作る。
「ばーか、『赤』なんて、作り話だよ」
「冗談だっての」

何処にでも巧妙な噂があるもので、密売界隈もその例に漏れない。『赤』と言う薬の、まことしやかな噂があった。服用した際の、類を見ない多幸感。現実より現実味を帯びた幻覚。そして極めつけに、全てをかっさらう、猛烈な副作用。余りにも酷い副作用から生き延びた者がいないことによって、『赤』の詳細も闇の中。

最期の一節が肝で、これは噂にありがちな、単なる辻褄合わせなのだと思う。『赤』なんて呼び名にも、何とも雰囲気がある。由来は解らないし、そもそも由来など、初めからないに違いない。巧みな小話に意味深なタイトルを付ければ、あっという間に噂の出来上がり。きっと、そんなところだろう。

酒を飲む手を止めて、俺は時計を見る。黒の塗装が点々と剥げ、下地の銀が透ける筐体の中で、赤い短針と鉛の長針は二十二時四十七分を示していた。

「ヤス、遅いな」

俺は言った。リュードウは構わず、焼き鳥を咀嚼している。塩を掛け過ぎたのか、いつも着ているダークグレーのスーツの胸にまで、鳥肉から塩が落ちてしまっていた。

「忘れてるんじゃないのか？」
「昨日の今日、電話でした約束だぞ？」

俺の言葉に、リュードウは黙る。俺はテーブルの脇に除けておい

た携帯を取って、画面を点けた。抽象的な配色。ヤスの番号を呼び出し、俺は携帯に耳を当てた。プリセットの呼び鈴が途切れて、ヤスの阿呆そうな声が聞こえてくる。疑いなくそう思っていた。

しかし、いくら待っても、呼び鈴が途切れることはない。終わりを見失ってしまったみたいに、軽妙な電子音は鳴り続ける。俺は耳を離して、通話を切った。

「繋がらない」
「何？」
「繋がらない」

リュードウは顔をしかめながら、こめかみを掻いている。人差し指に嵌められたシルバーの指輪が、オレンジ色の照明に鬱陶しくちらついて光った。

「どうせ寝てるんだよ、あいつ」

面相臭そうな声色で、リュードウが言った。俺は頭の片隅に煩悶と渦巻いている何かに、どうにかして焦点を定めようとしていた。

「ハル、どうした？」
個室の外を走る廊下を、会計に向かって大勢が連れ立って歩いている。
「なあ」
俺は言った。
「ちょっと俺、あいつの部屋見てくるわ」
「あいつの部屋って言っても、結構遠いじゃねえかよ」

リュードウの額は、微かに汗が滲んで、鈍く照っていた。後ろの

壁には、西洋絵画のレプリカが掲げてある。一面に咲き乱れている花畑と青空のずっと遠くに、唯一、小高い山が配置されていた。無茶苦茶な構図であることは、俺にでも解る。

俺は扉を勢いよく引いて、個室を飛び出す。

「おい！」

俺はポップスが流れる中、会計に戸惑って混み合いを作っている一行を押し分けて、店の外へ出た。寒さが身に染みる。俺は駆け足で、より賑やかな方へタクシーを探しに向かった。

飲食店が並ぶ通りを走り抜けるタクシーはどれも、酔い潰れた客を乗せている。俺は車と人々が行き交う眩しい景色を、タクシーを探すために必死で見回した。そのうち、後ろからリュードウが俺を呼ぶ声が迫ってきた。俺は振り向く。

「後でちゃんと、半分払えよ！」

リュードウは苦しそうに前屈みになって、息も絶え絶えに言い放った。

「お前、料理は？」

俺は驚いて、訊いた。

「お前の分まで、慌てて口に掻き込んできたっての」

リュードウは笑いながら親指を立てた。白い歯が覗いて、一瞬、繁華街のネオンに煌めいた。犬歯の辺りに、胡椒が挟まっているのを見逃しはしない。

「じゃあ俺は三分の一で良いだろ」

俺が言うと、リュードウは大通りの賑やかさに負けない声で言っ

た。
「おちょくってんのか、表に出やがれ！」
「表はここだ！」
地面を何度も指差しながら、俺も応じて怒鳴った。

実際、俺は酒をグラスの半分も飲んでいない。焼き鳥に至っては一本も手を点けていない。半分払えなんて、俺はいくら何でもやり過ぎだと思った。精々三千円にも満たない額の折半を争うなんて、二十代後半の男二人にしては身も蓋もないということも、薄々自覚はしている。

「タクシー」

そんなさもしい男二人の眼前で、四人組の中年会社員がタクシーを引き止めた。その四人を後目に、体良くそれに割り込んで、リュードウはタクシーに乗る。リュードウの目配せを受けた俺も後を追うようにして乗った。本来なら勝手に閉まるはずのドアだが、悠長に待ってはいられない。俺はドアを、核シェルターに何とか滑り込んだ映画のワンシーンみたいに、大急ぎで閉める。ドアを閉める間際に、怒号が聞こえた気がした。

「運転手さん、とりあえず出してくれ」

リュードウが叫ぶようにして告げると、運転手は眼を丸くする。酔った中年の一人が怒りに任せて思い切り、窓を叩いたのを合図にして、タクシーは軽快に走り始めた。タクシーが空を飛ぶ時代が来れば、もっと軽快に感じるかもしれない。俺はそんなことを考えながら、小さくなってゆく繁華街を、振り返って見詰める。

シルバーの揺れ方（後書き）

『連載』と意識しただけで、肩に力が入るものですね。一話毎の字数は多くありませんが、推敲に時間を掛けていますので、スローペースな連載になろうかと思います。勿論、プロットは全部出来ていますので、途中で煮詰まることは恐らくないでしょう（苦笑）。完結までお付き合い頂ければ幸いです。

御拝読賜り、誠に有り難う御座いました。次話も宜しければ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4178z/

ゾンビ、思い出、レモンシトラス

2011年12月14日20時49分発行